北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業／北海道里づくりアドバイザー情報誌

第４号　２０１２年３月

編集・発行/北海道農政部農村振興局農村整備課
〒060-8588　札幌市中央区北３条西６丁目
TEL　011-231-4111　/　FAX　011-232-4128
E-mail:nosei.noson1@pref.hokkaido.lg.jp

里づくり

平成 22 年 10 月に大空町で開催された「輝農祭」の様子
（オホーツク総合振興局提供）

CONTENTS

● 地域づくりリレーインタビュー
株式会社谷組　代表取締役・北海道下川町議会議長　谷　一之　氏
「地域再生は住民が話し合う場づくりとビジネス的な視点が決めて」

● 北海道里づくりアドバイザーレポート　　南富良野町　岩永　かずえ　氏
「人と農業が好きだから、農業の大切さを多くの人に伝えたい」

● 実践！地域づくり　大空町大空地区
「次世代（こども）に自慢できる大空町を目指して」

● ＢＯＯＫＳ　『そうだ、葉っぱを売ろう！　～過疎の町、どん底からの再生～』

● トピックス
―人に学び、地域に学び、いまできることから始める―

「地域再生は住民が話し合う場づくりと ビジネス的な視点が決めて」

株式会社谷組　代表取締役・北海道下川町議会議長　谷　一之氏

谷　一之（たに　かずゆき）氏
下川町生まれ。名寄高校在学中、野球部に入り、１年生の時には北北海道大会の決勝まで進んだが、惜しくも敗れ甲子園を逃した。３年生の時はキャプテンとして活躍。その後、日本大学に入学し、土木工学を専攻。卒業後、地元に戻り、谷組の３代目として会社経営を行うとともに、建設機械・事務機器などのレンタルリース会社の（有）アフターやインターネットビジネスを行う部門「の―すも―る」を設立。農業にも参入し、ハウス栽培を行っている。20 代の頃から、下川町のみならず道北や北海道全体の町おこしに関する取組に尽力している。北海道地域づくりアドバイザー。

―谷さんと農業などの一次産業との接点からお聞かせください？

谷／谷組は土木・建設業ですが、建設機械・事務機器のリースを行う「アフター」という会社をつくり、会社の一部門として、農畜水産物のインターネット販売「の―すも―る北海道の森」を始めました。スタッフが道内をくまなくこだわりの食材を探し歩き、多くの商品をエントリーしています。最初は生産者などから相手にされませんでしたが、今は信用を得て、道内の農産物を全国に発送しています。

また、農業にも参入していて、七棟のハウスを設置し、主にフルーツトマトを栽培しています。昨年からはキヌサヤを試験栽培しています。

―インターネット販売は順調ですか？

谷／昨年は、お米が良く売れました。特に、ゆめぴりかが。楽天やヤフーなどに載せていますが、メルマガ会員が十五万人に達しています。ネットでは、町の情報なども配信できるため非常に有効です。

―ところで、谷さんが、地域づくりに関わるようになったきっかけは何ですか？

谷／就職する時、東北の企業に決まりかけていたのですが、父親から帰って来いと言われ、谷組に入りました。他の会社で丁稚奉公をしていないから、逆にいろんなことをやってやろうというハングリー精神があったのかも知れません。二十七歳の頃から下川町に留まらず、広域的な地域活動を始めました。

―どんな活動をされたのですか？

谷／三十三歳の時に下川町の商工会の青年部長をやることになり、三十四歳の時、「北の星座共和国構想」を立ち上げました。道北は、小さな町が多いのですが、それらの町を点から線へ、線から面へとつないでいこうという構想です。

―具体的には、どのような内容なのですか？

谷／四つの柱がありました。一つ目は点～線～面という広がり。二つ目はヒューマンネットワーク。三つ目は、グランドデザインの創造。四つ目は、ビジネスチャンス。また、道北というどこか暗さを感じる言葉をやめて、「北北海道」と呼ぶことにしました。このエリアにある五十の町に、地形、空気、水、食、静けさなどの特色を考慮して星座名をつけました。例えば、稚内市は、二つの岬が「タロー、ジロー」の犬の耳のようなので、おおいぬ座。士別市はサフォークで有名なので、おひつじ座。枝幸町はカニ座。といった感じです。そして、各市町村から窓口となる世話人を選出してもらい、「北の遊星人」と名付けて、取り組んでもらいました。

―イベントなどをやられたのですか？

谷／年に一回、スタンザム（スタンザ＝連なっているという意味の英語「スタンザ」と「アイアム（Ｉ ａｍ）」を合わせた造語）シンポジウムを民間ベースで開きました。毎年、二百名ほどの人たちが集まって、にぎやかに交流しました。

他に、バレンタインに新郎新婦が雄武町から羽幌町まで横断するバレンタインウエディングツアーを行いました。コースとなる市町村の北の遊星人たちが、新郎新婦をバトンタッチしながら運んだのです。これは、盛り上がりました。

また、北の遊星人クラブをつくり、本州に会員を募ったところ、六百人ほどになりました。年会費三千円を頂き、定期的に情報誌を発送しましたが、大きな財源になりました。

―反響はどうでしたか？

谷／ダスキンが、星座をかたどったマットをつくってＰＲしてくれるなど、思わぬ協力者が現れました。また、世界五万店で使用できる割引カードの絵柄に使われ、使用料の五～二〇％がこの共和国に還元されました。対外的にはとても面白いといって、取り上げられることが多かったですね。

―他にはどのような活動をされたのですか？

谷／平成元年に北海道ヒューマンネットワークプラザが当時の横路知事の肝いりで立ち上がり、平成六年から四年間代表を務めました。これは、道内の地域づくりリーダーや企業など多様な人たちを結びつける場づくりです。登録会員が六百名以上にもなったんですよ。その間、道庁主催で「全道地域づくり交流会」が毎年開かれていましたが、平成十六年に財源が厳しくなり、中止となりました。でも、是非、またやって欲しいという声が多かったため、平成十八年に「全道しごとおこし・まちおこし人情報交流会」という名称で立ち上げました。私は三年間実行委員長を務め、その後別の人にバトンタッチしたのです。

―これらの活動のねらいは何なのですか？

谷／ビジネスです。交流の場などで、名刺交換などをしてもらい、ビジネスのきっかけをつくることです。町づくりでは、どこもいろいろなイベントを行いますが、多くがビジネスに重きを置いていないですね。やはり、ビジネスチャンスをつくることが大事だと思います。

―どこも町づくりでは苦労していると考えますが、下川町はどうですか？

谷／故人となられた北電の戸田元会長が提唱していたクラスター構想を受けて、いち早く下川町にクラスター研究会が立ち上がりました。平成十年のことです。それから四年間、いろいろなテーマで六、七つの分科会をつくり、検討を行ってきて、実際に取り組みを推進させるための組織としてクラスター推進部が設置されました。この組織は、企業と企業のコーディネートや企業と農業者のマッチング、また、各種設計業務も請け負ったりして、ビジネス的な運営を行うシンクタンク的な役割を果たしています。この仕組みが、非常に良く機能して、下川の町おこしにつながっています。

―下川町にも限界集落のような地域があるのですか？

谷／下川町は、私が生まれた昭和三十年に一五，五五五人あった人口が、現在は三，六００人になりました。人口の減少率はすさまじい。過疎化・高齢化が進んでいます。集落の単位としては、行政区になりますが、それが下川には十八ヶ所あり、その中には限界集落もあります。

―限界集落のように過疎化・高齢化が進むと集落はどうなるのでしょうか？

谷／例えば、一の橋地区という集落があるのですが、人口が一五〇人で下川の街から十二㎞のところにあります。ここはまさしく限界集落で、高齢化に伴い独居老人が増えています。買い物や病院への往来などが大変で、バスはありますが不便であり、町はタクシーの補助金などを支出しています。コミュニティ活動も少なくなり、人間関係が希薄になってきています。

―このような集落に対する行政の特色ある支援などはありますか？

谷／下川には、集落ごとに町職員が張り付いていろいろなお世話を行う地域担当職員という制度があります。住民の要望を聞いて歩いたり、イベントの手伝いを行ったり、お金を使わない行政サービスとして、ボランティアで行っています。他の町村でも同様の制度がありますが、なかなかうまくいっていないようですね。下川は比較的うまくいっていると思います。それは、上からの命令ではなく、職員のアイディアを活かして実現したボトムアップの制度であるため、皆やる気になったためだと思います。

―ビジネスは限界集落などの再生にも不可欠と考えますか？

谷／ビジネスを創出して、雇用の確保を図ることが重要です。先ほどの一の橋地区を町の集落再生のモデルとして位置づけ、野菜工場やコレクティブハウスをつくったり、やまびこ学園という障害者施設と連携した取り組みを行うなどのバイオビレッジ構想がつくられました。

―最後に、行政や北海道里づくりアドバイザーのような人たちへのアドバイスはありますか？

谷／住民たちの話し合いの場を設けられる人になって欲しいですね。ワークショップなどを行い、住民たちの声を聞き、吸収できる人が今一番求められます。住民は誰でも行政批判はやります。でも、自分の役割を議論できる人はなかなかいない。住民たちの話し合いの場をつくり、皆で議論するうちに、これなら俺はできるという前向きな可能性を発見させるようなことが大切で、そのためのきめ細かな話し合いやワークショップが重要なのです。インフラも大事ですが、このようなソフトの部分が集落再生には欠かせません。やはり、人づくりが大事ですね。

―下川町は、平成二十年度から環境モデル都市、平成二十四年度から、環境未来都市、地域活性化総合特区に指定され、循環型のビジネス面もにらんだ町づくりを推進する。谷さんのお話は、ポイントをついた非常に興味深いものでした。現在もオール北海道の観点から地域おこしを仕掛けている谷さん。お忙しいところ時間を割いていただき大変有り難うございました。

北海道里づくりアドバイザーレポート

「人と農業が好きだから、農業の大切さを多くの人に伝えたい」

南富良野町　岩永　かずえ氏

岩永　かずえ（いわなが　かずえ）氏
昭和 24 年福井県福井市生まれ。昭和 49 年南富良野町北落合に移住。ニンジン、じゃがいも、タマネギなどを栽培する約 70ha の経営面積を有する畑作農家。平成 11 年度南富良野農協女性部長、JA 上川地区女性協議会役員を歴任。その後、JA 北海道女性協議会の副会長を経て、平成 23 年度から同協議会会長。

岩永さんは、平成二十三年、ＪＡ北海道女性協議会会長に就任し、格段に露出度が高くなった。テレビや新聞、雑誌等々で見かけることが多くなり、忙しい毎日を送っていることは容易に想像できたが、今回初めて女性の指導員を取り上げるということで、岩永さんにインタビューをお願いすることにした。

岩永さんの自宅は、南富良野町の中心部から、十八㎞ほど上った標高六三０ｍの高台にある。手前にある北落合小学校が目に入った時、筆者は、まだそんなに古くはないのに廃校になるなんてと勝手に思ってしまった。正直、北落合の集落自体、まとまった戸数があるとは思わなかった。聞けば、農家が十五戸ほどあり、小学校の先生の家もある立派な集落である。小学校は全校生徒五名であるが、廃校の話はない。何と、来年以降生徒数が増えていくというのである。集落の農家のおよそ九割に後継者がいる。だから、これから子どもたちは増えていくと聞いて、驚いてしまった。小学校は集落にとって大きな灯火である。子どもたちとの雪解け後のゴミ拾いから始まって、学校や集会場の花壇の花植えや触れ合い運動会の開催など行事が続く。小学校が集落民の絆をつなげる核となっているのである。

岩永さんは、福井県の出身で、昭和四十九年六月に現在の場所に移住してきた。福井では肉牛経営を行っていた。しかし、周辺が住宅地に変わっていく中で、国際農友会の実習生（ファームトレーニング）として、アメリカで研修を受けたご主人が広大な草地で牛を飼うことを夢見て、北海道にロマンを求めた。農地を探し、十勝、上川とわたり歩いたが、なかなかまとまった面積の農地を見つけることができなかった。やっと南富良野町で農協が所有していた五十㌶の農地を譲ってもらうことができた。しかし、その後、肉牛経営は行き詰まり。ご夫婦は大きなダメージを受ける。一時夫の健康が損なわれて福井に戻ったが、心機一転畑作経営で再出発することになった。

岩永さんは、農業の経験がなかったが、ご主人と結婚して、農業の魅力を知った。ご主人の農業に対する姿勢は、真摯という表現がピッタリだ。作物が育つ土台である土づくりには非常に精力を遣い、土をとことん大事にする。いもに関しては除草剤は使わず、農薬は作物の生育状況を見ながら必要最低限にし、一般的な防除カレンダーを踏襲するようなことはしない。じゃがいもも枯凋剤は使用しない。完熟するまで、畑の中に置いておくため、雪が降って被害を受けるリスクと毎年戦っているのである。できた農産物へも強い愛着を持つ。収穫の時に岩永さんがじゃがいもをちょっと放り投げて集めると、こっぴどくご主人から怒られるそうである。そんなご主人を尊敬し、農業に対する思いも高まっていく。

「作物の栽培は、土づくりと愛情をかけること」という岩永さんの言葉から、これまで頑張ってきた蓄積が感じられた。

岩永さんの農産物は、ファンが多く、全国に宅配されている。春一番の宅配は、グリーンアスパラを、夏には、『夏野菜セット』と称した野菜の詰め合わせを送り、好評を得ている。ニンジンは、大変甘くて美味しいため、特に人気が高く、なかなか手に入らない状況である。今年の一月一日に息子さんに経営を移譲したそうだが、岩永さんの農業に対する姿勢が息子さんにも影響し、岩永哲学が浸透しているようで、ほほえましく感じた。

岩永さんは、以前から不登校の若者や職場からスポイルされた人たちを受け入れ、農作業の手伝いをさせたりして、自立支援のような活動を行ってきた。岩永さんの人柄なのか、知り合いから頼まれては、これまで数多くの子どもたちを住まわせた。長い人で二年間近く住み込んだ若者もいたそうである。心身ともに疲れた子どもたちが、岩永さんのところに来てしばらくいると、劇的に元気になった。「ここの自然と農業が子どもたちの心を癒すのよ。私は基本的に人が好きなのかも知れない。来てくれた子どもたちには、好きにさせる度量が大切なのよ」と語る岩永さんだが、その包容力と自分の子ど

ものように接する教育力が大きく寄与していることは間違いない。今でこそ、子ども農山漁村体験プロジェクトや農村ファームスティなどの取り組みが活発に行われているが、当時はまだそのような動きは目立っておらず、岩永さんは、先駆的な活動を行っていたといえる。その後、今から二十年ほど前になるが、北海道では函館くらいしか実施していなかった国際交流事業の話を役場から打診され、真っ先に手を上げたそうである。地元の受け入れ先は、当時十八戸前後あったが、現在五、六戸に減っているそうである。毎年、アメリカやイギリス、マレーシア、中国、台湾などから留学生を受け入れたが、特に台湾の留学生が多く、台湾には岩永ファミリーというネットワークがあり、現在も交流が続いているそうである。

子どもたちの受け入れを行っていることもあって、グリーン・ツーリズムには昔から興味があり、平成十年ころ、東京にある社団法人農山漁村女性・生活活動支援協会が実施しているグリーン・ツーリズムの専門家養成講座を受けた。レポートの作成が大変でどんどん受講者が脱落していく中、最後まで頑張って終了証書を手にしたとのことだ。新得町でファームインを経営している湯浅優子さんは、先輩卒業生とのこと。

このように交流活動を活発に行ってきた岩永さんは、特に農村女性のネットワーク化と組織活動では顕著な役割を果たしている。

ＪＡ富良野女性部では、伝統ある漬け物コンクールを活発化し、平成七年には、富良野管内の女性農業者のネットワークである『いきいき富良野ネット』を仲間たちと共に立ち上げ、上川管内の広域的なネットワークとして、『ほほえみ』を構築。これは、道内の女性農業者ネットの先駆的な役割を果たした。『いきいき富良野ネット』では、地産地消を広めるためのレシピづくりをしたり、『ほほえみ』では、寸劇で消費者に食の大切さを訴えるなど、ユニークな活動を展開している。このような活動の蓄積が、現在のＪＡ北海道女性協議会の活動にも生かされているということだ。

岩永さんにとってネットワークの効果と目的とは、農村女性の自立をめざし、我が家の農業経営に参画できるような人材になることで、いろんな面で勉強になるそうだ。元来、じっとしていられない性格で、知識欲旺盛。そのような岩永さんの性格が、活動に駆り立てる。

最後に、息子さんへの経営譲渡も終わり、新たな展開を迎えることになる岩永さんに、これからの抱負を聞いた。

「農業の応援団を増やしていきたいのよ。東大に進学して、商系や医者になる人が多い東京で有名な進学校の武蔵高校の生徒を受け入れたことがあったのさ。その子に花壇の草むしりをさせた時に、花なのか雑草なのかが分からなくて、それが一番大変だったと言われたのよ。でも、うちに来て、農業がとても大事だと実感したと言ってくれたのさ。そういう人に農業の大切さを伝えてもらう。人って、何でも体験しないと分からないのよ。何でこんなことを言うのかとびっくりすることもあるけど、それがその子にとってはとても大切なのよ。農村に来て、自然に浸り、農業を体験して、農業の応援団になってもらうようなことをやっていきたい。これからも、家にじっとしていることはないと思うよ。」

岩永さんの元気に感動したひとときでした。

BOOKS

『そうだ、葉っぱを売ろう！～過疎の町、どん底からの再生』

横石知二　著

「過疎化、高齢化が進んでしまった地域で、いったい何ができるというのか・・・」そんなネガティブな考えに陥った時に、是非読んでいただきたい本をご紹介します。

この本の著者、横石知二氏が農協の営農指導員として徳島県上勝町に赴任してきた当時、過疎化と高齢化が進み、お年寄りといえば愚痴や悪口を言うような寂れた町でした。

なんとか町の役に立ちたい、特産物を生み出したいと想い続けていた時、料理に添えられている植物の葉「つまもの」から葉っぱを売るビジネスを思い付きます。周囲の冷ややかな態度の中、料亭に通うなどさまざまな努力を重ね（株）いろどりを設立します。

町の裏山にあった葉っぱが、今では 70 代、80 代の高齢者が売上高 2 億 6000 万円を稼ぎ出すビジネスとなり、中には年収 1000 万円を稼ぐおばあちゃんもいるとか。

横石氏が取り組んだ地域再生ストーリーに感動すると共に、多くのノウハウが詰まった一冊。どんな地域にも可能性は絶対ある！

■発行：ソフトバンククリエイティブ
2007 年発行　定価 1,575 円（税込み）
＊書店での注文となります。

★★ 実践！ 地域づくり ★★

次世代（こども）に自慢できる大空町を目指して

～有機農業を通しての街おこし～

大空町大空地区の取組

オホーツク総合振興局管内の大空町では中山間ふるさと・水と土保全対策事業を活用して、有機農業の普及・食育活動など様々な取組をしています。事業に取り組むこととなったきっかけや活動内容を紹介します。

大空町は、オホーツクの空の玄関である女満別空港を擁し、網走湖、藻琴山、メルヘンの丘、東藻琴芝桜公園など四季の自然が豊かな人口九千人の町です。主要産業は農業で、町全体面積の三十七％（一二，六六七㌶）を農地が占めています。麦類、馬鈴薯、甜菜の畑作三品を主に、豆類、長いも、とうもろこし、グリーンアスパラなど多岐にわたる栽培がなされています。

農産物の増収目的に化学肥料や農薬を使用したことにより、消費者からの「アトピーに苦しむ子供達を助けてほしい。」との要望があり、何かの手助けにならないかとの思いで、平成元年に町内七名の農家が有機栽培同友会「大地のＭＥＧＵＭＩ」を設立し、無農薬・無化学肥料の野菜栽培を試みた。はじめは手探り状態での経営であったが、環境にやさしい土づくりの確立と消費者ニーズが相まって次第に有機農業が理解されるようになった。

平成二十年には有機農産物の販路拡大を目的に、大地のＭＥＧＵＭＩと農業生産法人大橋牧場、大空建設業協会、めまんべつ産業開発公社、大空町、大空町教育委員会で「大空町の食と農を考える協議会」を設立し、有機農業の経営拡大・加工品開発等を進めることとなった。同時に地域の将来を担う子どもたちが有機野菜の栽培を通して農業を肌で感じてもらい、生命をつくり出す「食」の重要性を学んでもらう食育活動を進めていくこととなった。

有機栽培圃場で播種作業をする地元の小学生たち

北海道大学・相馬准教授から有機農業の特徴を学ぶ地元の小学生たち

大空町教育委員会とタイアップし、女満別小学校・東藻琴小学校六年の生徒たちを対象に「大地のＭＥＧＵＭＩ」有機栽培ほ場でかぼちゃの栽培学習を実施している。かぼちゃの播種作業からマルチ剥がし、発芽率調査、除草作業、収穫作業まで定期的に畑を訪れ農作業体験を行っており、収穫したかぼちゃは一流シェフの指導のもと自分たちで調理して試食したり、毎年十月に開催している「輝農祭」の場で、一般のお客様への販売体験もしている。また、有機野菜の特徴や有機農業に必要な土づくりなど学識経験者を招き学習会も開催している。

子供達には、かぼちゃの播種作業から収穫作業まで汗を流し、自分で調理した料理を美味しくいただき、お客様の笑顔が得られる対面販売までを体験することで、「食」への関心が高まり、「社会」の仕組みを学ぶ貴重な体験となっている。

中山間ふるさと・水と土保全対策事業では、一流シェフや学識経験者への報酬費と旅費を弁済しており、協議会からは「活動費の負担軽減と地域の活性化に大きな役割を果たしている。」と感謝されている。

有機野菜をＰＲし消費拡大に繋げていくため、また、消費者への感謝の意を込めて大空町道の駅「メルヘンの

京王プラザホテル札幌・尾澤料理長の指導の下 かぼちゃプリンを作っている様子

自分たちが作ったかぼちゃをお客様へ
対面販売している小学生たち

丘めまんべつ」で毎年十月第三日曜日に「輝農祭」を開催している。有機栽培ほ場のある大空町日進に「大地のＭＥＧＵＭＩ」の仲間たちがログハウスを建て「輝農館」と名付け、平成十五年から日進公民館の駐車場を利用し、「輝農館祭り」という名前で始めたのが先駆けで、平成二十年に「大空町の食と農を考える協議会」設立を期に、来場者が増えてきたこともあり、名称を「輝農祭」に変え、開催場所を道の駅「メルヘンの丘めまんべつ」に変更して祭りを続けている。町内の有機野菜生産者に限らず、全道各地から生産者が集まり出店している。平成二十二年のお祭りには四千人の来場者を記録し、平成二十四年には「輝農祭」来場者六千人を目標にしている。

平成二十二年には、「輝農祭」来場者の皆様に協議会が行っている有機農業の普及・拡大活動や食育活動、有機野菜を使った加工食品の開発、網走湖の水質悪化の要因となっている水草・枯ヨシを使っての堆肥製造（土づくり）などをパネルとパンフレットで紹介した。

パネルとパンフレットの作成（印刷）も中山間ふるさと・水と土保全対策事業の支援を受け、広報活動を行った。パンフレットについては一万部印刷し、祭り内での配布のほか、大空町役場、商工会、ＪＲ女満別駅、町内ホテル等の協力を受け各所で配布した。パンフレットを多くの方々へ配布できたことは、活動内容を内外にアピールすることとなり、効果的な取組であった。

「輝農祭」の進行方法や運営予算の確保、出店者の確保など一部課題が残されているが、徐々に課題をクリアし、「有機農産物」を愛する皆様で創る祭りとなるように頑張っていただきたい。

かぼちゃの収穫

「輝農祭」の中で協議会活動内容を説明
したパネル・パンフレットを設置

大地のＭＥＧＵＭＩでは、めまんべつ産業開発公社と共同で有機野菜を使った加工食品の開発を進め、平成二十年に減農薬馬鈴薯と無農薬かぼちゃを使った「団子餅」を商品化し、「大地の輝餅（きもち）」と名付け販売し始めた。当初は、一つの餅の大きさが大きく扱いづらかったのを、平成二十二年に一口サイズに加工しなおし、町内外の飲食店へ卸すなど有機野菜の消費拡大に努めている。

また、平成二十三年から協議会では、「輝農祭」の開催や地元小学生による農業体験を更に発展させた形で、農業体験ツアーの企画をはじめた。大空町が持ち合わせる豊かな自然環境と美しい景観を組み合わせた農業体験観光が、農村と都市を交流させ、地場産品の消費拡大や農業と環境に興味を抱く子どもたちが育っていくものと考えている。

「大地のＭＥＧＵＭＩ」と「大空町の食と農を考える協議会」では、活動内容等をホームページで紹介していますので、次のアドレスに接続してみてください。

「大地のＭＥＧＵＭＩ」のホームページ
http://www.daichinomegumi.net/

「大空町の食と農を考える協議会」のホームページ
http://www.oozora.jp/syoku-nou.htm

一口サイズに生まれ変わった「大地の輝餅」
左から「ごま入り」「プレーン」「かぼちゃ」

トピックス

○平成２３年度北海道ふるさと・水と土指導員会の開催報告

平成２４年２月２９日（水）に開催した指導員会には、指導員３３名が出席しました。

北海道大学大学院農学研究院　博士研究員　糸山健介氏に「富良野市における集落問題の実情と打開に向けた地域づくり」と題して講演いただき、本道における集落の現状等について理解を深めました。

グループ討議は、「集落の現状と課題、集落再生の方策」をテーマに、集落再生と持続化に向けた指導員の役割について意見交換と発表を行いました。

また、北海道中山間ふるさと・水と土保全対策委員　委員長　松木靖氏から、本道における地域が過疎化や高齢化で活力を失っている中、指導員が担うべき役割や期待される取組などについて激励を込めて総評を頂きました。

平成２４年度の活動の活発化に向け、指導員相互の情報交換や連携を深めた指導員会となりました。

指導員会の様子

講師：糸山氏

グループ討議

○北海道ふるさと・水と土指導員会幹事

２月２９日に開催した指導員会及び幹事会で、幹事が改選されました。平成２４年度は１１名の幹事で進めていきますので、よろしくお願いします。

■平成２４年度事業計画

- 全国研修会（10・２月頃）
- 地域づくり研修会（９月頃）
- 現地研修（鶴居村　時期未定）
- 指導員会研修会（２月頃）
- 情報誌「里づくり」（年２回）

幹事会の様子

北海道ふるさと・水と土指導員会幹事

氏　　名	市町村	役職名
小野寺　孝一	当麻町	会長
阿岸　哲広	石狩市	副会長
外山　陽一	雨竜町	
鏡山　英利	むかわ町	
元山　美芳	八雲町	
小笠原　明彦	江差町	
岩永　かずえ	南富良野町	
白府　勝二三	苫前町	
馬渕　陽子	北見市	
神　義宏	豊頃町	
服部　政人	鶴居村	

「大地のMEGUMI」お取り寄せ

『実践！地域づくり』で紹介した「大地のＭＥＧＵＭＩ」では、有機栽培・特別栽培にこだわったグリーンアスパラガス、じゃがいも、かぼちゃ、「大地の輝餅」などを通信販売しています。

■大地のＭＥＧＵＭＩホームページ
http://www.daichinomegumi.net/index.html

大地の輝餅

しじみ美醤油

かぼちゃ

じゃがいも

【編集部から】

昨年来、限界集落の話題が取り沙汰されています。明治大学の小田切教授は、一般に限界集落の問題は、「人」「土地」「むら」などの空洞化と捉えられるが、最も深刻なのが、住民がそこに住み続ける誇りや生きがいを見失う「誇りの空洞化」だと訴えています。そして、都市の暮らしのものさしを基準とすることなく、地域の中に基準を構築することが必要で、それは地域の歴史であったり、自然であったり、郷土料理、人情、文化であったりすると言っています。今回本誌に登場していただいた谷さんや岩永さんは、地域のものさしをしっかりと持って、誇りの再生を目指しているのかも知れません。今後も誇り高き人たちを取り上げていきたいと思います。